HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	戦争と鎮魂 ： 元軍戦死者怨霊追善碑をめぐって ：(上)
著者	テレングト，アイトル
引用	北海学園大学人文論集，31：A1-A20
発行日	2005-07-29

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

戦争と鎮魂

――元軍戦死者怨霊追善碑をめぐって――（上）

テレングト・アイトル

目次

1　はじめに――「蒙古の碑」
2　従来の「蒙古襲来」観
3　モンゴル帝国とその実態
4　第一次「蒙古襲来」と「大元大モンゴル国」
5　第二次「蒙古襲来」
6　無学祖元の来日と怨親平等・御霊供養
7　「蒙古の碑」の再発見
8　大日本帝国と「蒙古の碑」の再祭祀
9　結び――「蒙古の碑」の意味と象徴性

（以上、本号）

（以上、次号）

1　はじめに――「蒙古の碑」

一枚の板碑――現在、仙台市宮城野区善応寺の境内〈写真1〉に立てられ、「蒙古之碑」〈写真2〉と称し、約七百年前「蒙古襲来」時、元軍戦死者の怨霊を鎮めるため、中国の禅僧無学祖元によって建てられた追善の碑という〈写真3〉。

板碑正面に向かって左側には石碑が建ち、銘文「古道猶存」と四字ある。落款には「徳王」。石碑背面には「昭和十六年二月二十六日蒙古聯盟自治政府主席徳穆楚克棟魯布閣下親しく蒙古碑に礼拝す。此来詣を永く記念するため茲に碑を建つ。昭和十九年五月一日　塩沢鶴岩切有志一同」とある〈写真4〉。

板碑正面に向かって右側に赤松がそそり立ち、手前の石碑に「徳王御手植えの松、昭和十六年二月十六日」とある〈写真5〉。

さらにその手前に和歌・俳句を綴った複数の石碑・句碑があり、そのなか際だって中心に建ってあるのは、「蒙古の碑」を偲ぶ四十七首の俳句が彫られた板碑式の「献句碑」である。落款には「昭和五十一辰歳仲秋九月二十日、善應第廿四世景巌書」とある〈写真6〉。

ところが、北条時宗、フビライ・ハーン、無学祖元、安達泰盛、関東軍、徳王、そして代々にわたって現在まで板碑を保存

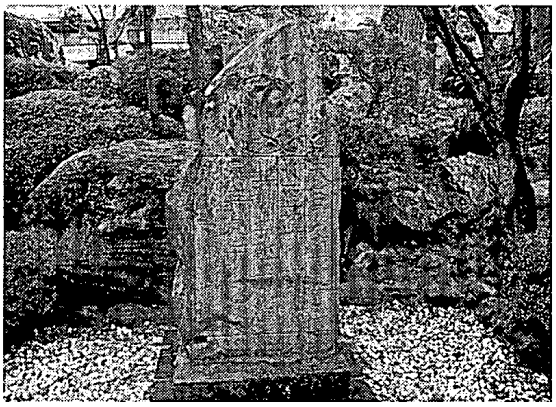

写真3　元軍戦死者追善の碑

写真1　仙台善応寺

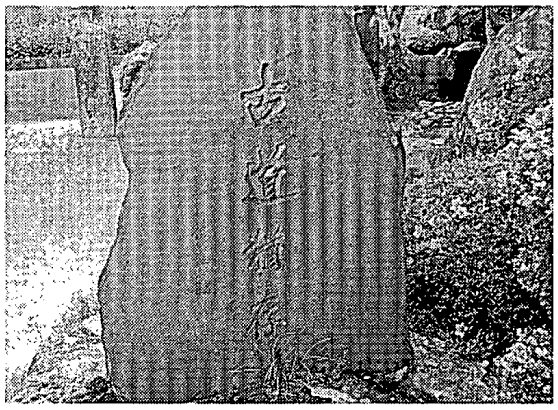

写真4　徳王の銘文

写真2　蒙古之碑

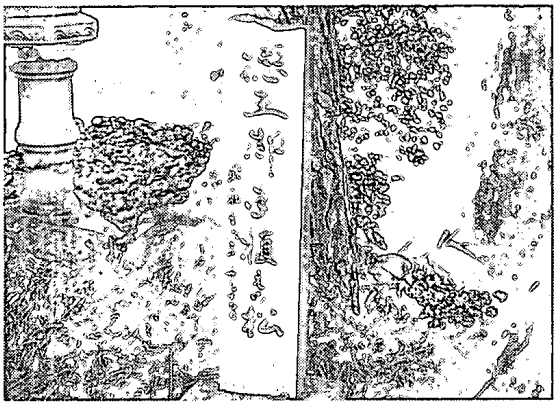

写真 5　徳王の植えた赤松

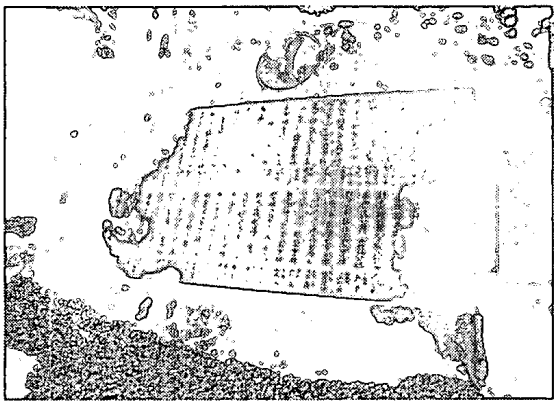

写真 6　仙台市民の献句碑

して祭ってきた仙台地域の住民……、一見、これらの人はお互いに直接関係がないように見えるが、しかし、実際この一枚の板碑によって歴史の時空を超えて結ばれているのである。

事実、このような文永・弘安両度の役の侵略側の犠牲者のための追善の塔は、十三世紀当初から博多湾を中心に多く建てられ、祭られていたという(仙台にすら複数の箇所ある)。その後長い歳月に紛れ、徐々に廃れ、忘れ去られたものが多かったが、現在まで保存され、かつ祭り立てられてきたものは、博多とその周辺に残っている旧跡を除き、この仙台にある「蒙古之碑」は屈指の名跡だといえる。

この板碑の背景には、一体、どういう経緯があって、何のため祭り立てられてきたのか。博多に攻めてきた元軍戦死者の怨霊の追善の塔がなぜ仙台までに建てられたのか。板碑には一体何が秘められ、人々が意識的に、あるいは無意識的に今まで祭って参拝してきたのか。実際、この類の怨霊追善の板碑には謎が多く、そこに複数の意味が錯綜し、介在しており、昔から祭り立てられ、現在でも丁重に扱われ、まるでそれをもって何かを寓意し、象徴しているかのようである。

事実、この板碑の背景には十三世紀の日本・中国・韓国・モンゴルの歴史に関わる記憶があり、十八世紀に再発見され、二十世紀再び歴史の表舞台に脚光を浴びた経緯があったのである。歴史・文献学的に考察すると、それは十三世紀から現代まで日・中・蒙・韓間の歴史において、確かに第一級の決定的な瞬間を表象できるモニュメントになるとは考えられない。しかし、人々の生と死にかかわる願い事・信仰の象徴として考察する場合、あるいは大東亜戦争中に新たな意味が付加された経緯を加えて考える場合、それは紛れもなくこの諸地域の民族の宗教観・死生観ないし世界観を垣間見る、稀有な象徴的な記念物となるのだ。したがって、いうまでもないことだが、もし「霊」への畏敬・畏怖という古来の人々の信仰を前提にして考えよう

とするならば、この板碑は明らかにわれわれの現実世界を超越した何かを示唆・暗示しているようで、いわゆる近・現代でいう民族・国家・イデオロギーなどの諸矛盾を超えて、それ自体が何かを物語っているのも紛れもなく事実だと考えられる。

十三世紀文永・弘安の両度の役とその歴史の背景については、現に日本では中学校の教科書までに普及されている。しかも、その歴史にまつわる物語・フィクション・マンガ[1]などは近年増え、とくに二〇〇一年、NHK大河ドラマ『北条時宗』が上演されてから、「蒙古襲来」についてだれにでも諳んじられるほど世に知られているといっていい。「蒙古襲来」はまったく疑問視されることがなく、またその必要もなく、歴然たる、明確な、生き生きとした歴史事実として受け止められている。しかし、この「蒙古襲来」において双方とも多くの犠牲者を出したことはともかくとして、妙なことに、現在のメディアに乗じて話題になった「蒙古襲来」の言説とは反比例にして、逆に当初から現在まで祭り立てられてきた犠牲者怨霊の追善の塔――「蒙古の碑」や「蒙古塚」などについては、まるで忘却のかなたに置き去られたかのようにもみえる。もちろん、忘れ去れたというより、日本の内部の視点からみれば、むしろこの敵味方なく、怨念をもって死んだ人々の霊に対する祭祀・記念は、当然なことであり、何の変哲もないことになるかもしれない。しかし、日本のソト側から見ると、事態はまったくそうではなくなる。とりわけその両度の役の犠牲者となる敵としての侵略者の怨霊が現在まで、日本において祭ってきたのだ、という歴然たる事実を正視してみると、誰もが奇異に思うに違いない。というのも、日本史上、襲来者元軍とは日本にとって最初また最大の「国難」をもたらした宿敵なのだ。

たしかに、この敵の怨霊を祭る「蒙古の碑」――板碑には、仏教の「卒塔婆」という形をなぞってきた部分があり、そこにはまたアニミズム・神道・仏教などのシンクレティズムが見え隠れている。それが長年の歳月に紛れ、確実な資料が少なく、伝説・御伽噺に近い記念物として祭られてきた向きもある。しかし、二十世紀に入ってからこの板碑は、突然、現代的な息・意味を吹き込まれ、新しい歴史的な記念物として甦られたのだ。つまり、二十世紀前半日本は、大陸への拡張に伴い、中国から独立を図るモンゴルの徳王と提携していくために、六百年前の板碑が、またと新たな役割を果たされるようになったのである。いわゆる戦前日本の大東亜共栄圏・五族協和の政策の一環として、この板碑はモンゴルとの同盟・従属関係を象徴する記念物として再生させられ、「蒙古の碑」には近代国家的イデオロギー

の「霊」が吹き込まれたのである。当初「蒙古襲来」の宿敵の怨霊を鎮めるための祭祀の板碑が、奇しくもこの現代において改めて祭られ、元来の超民族・超国家的な祈祷の祭事が現代のイデオロギーのプロジェクトとして復活され、再実施されたのだ。しかし、皮肉なことには、この板碑の建立者は十三世紀モンゴルの侵略に晒され、陥落された「南宋」（厳密に言えば元朝）から日本に渡った漢族の禅僧――無学祖元という人だった。つまり、亡国の念を抱いて元朝から「逃れてきた」といわれてきた無学祖元が、よりによって日本で、侵略者元朝軍の戦死者怨霊を鎮めるために板碑を建てたのだ。さらにアイロニカルなことは、戦前日蒙従属・同盟のため、もと侵略者・加害者となる元朝皇帝フビライの直系末裔となる徳王が、もと被害者となる日本側の案内に導かれて、その板碑に参拝し、かつ新たな石碑を建て加え、その霊を奉ったのである。その共通の目標は、無学祖元の母国である中国の支配からモンゴルを独立させ、日本の傘下に入り、同盟・従属関係を確立するためだった。換喩的な言い方で言えば、中国・無学祖元が日本のために建てたモンゴル侵略軍の怨霊追善の碑を、今や日本・北条時宗の末裔が、モンゴル・フビライの末裔を案内して共に奉ったのである。

このように、一枚の板碑には戦争と平和、鎮魂と「振魂」、慰藉と恐怖、願掛と失意、畏敬と背信といったようなさまざまな矛盾した意味が錯綜し、背反する思惑と記憶がそこに凝縮されている。板碑を長い歴史の流れにおいて眺めてみると、人々の生と死にかかわる諸々の祈願がまるで民族、宗教、国家、イデオロギー、政治ないし歴史を超えて行なわれてきたようにみえ、その蓄積の背後には、アイロニーが錯綜し、横断し、場合によって人々の浅はかな思惑・意志を含め、敬虔な祈願や懇願してきた人々の願いまでも逆に、あざ笑っているようにも思われる。実際、「蒙古の碑」それ自体は、もはや人々の一時的な軽佻浮薄な思惑に収斂されず、一貫して何かを象徴しているのだといっていい。

しかし、この一枚の板碑の起源と、それにまつわる人々の祈願・祈祷の蓄積と、歴史的背景をまず十三世紀に遡って考察しなければならない。とりわけ今まで「蒙古襲来」につき、日本の歴史記述の視野にはあまり取り入れなかった、十三世紀モンゴル帝国側の歴史を概観し、その歴史背景から見ることにする。

2　従来の「蒙古襲来」観

ひるがえって「蒙古襲来」とその歴史的背景について、一般

教科書[2]に沿ってみると、概ね次のように語られてきたといってよい。つまり、十三世紀初頭、北方の草原に突如としてモンゴル帝国が誕生した。その太祖チンギス・ハーン（一一六七～一二二七）は、一二〇六年即位してから数々の大遠征をし、その野望が息子から孫の世代へと継承され、その軍事的拡張は、ユーラシア大陸の東西まで広がる。五代目のフビライ・ハーン（一二一五～一二九四）は都を北京に移し、一二七一年に国号を「元」と称して、南は南宋を圧迫し、東は高麗をおさえて、ついに日本をも支配下におこうと計画するにいたった。

一二六八年の第一回目の使節派遣から文永（一二七四）・弘安（一二八一）の役後まで、通交・警告・脅迫のための使節派遣は計八回にものぼったが、鎌倉幕府はそれに対抗し拒絶しつづけてきた。フビライ・ハーンは使節派遣と同時に武力によって事を解決しようと、一二七四年元兵と高麗兵合計三万（また二万五千など様々の説有り）からなる軍を兵船九百隻に分乗させ、朝鮮南端の合浦から出発させた。彼らは対馬に上陸し、壱岐をおそい、肥前の松浦郡をおかし、博多湾に侵入した。日本軍は元軍の集団戦法や火器による攻撃のため苦戦におちいったが、暴風雨がおこり、一夜にして元軍兵船二百余隻がくつがえされ、残る船をまとめて合浦へ退却していった。これを第一回目の「蒙古襲来」・「文永の役」とよんでいる。

一回目の侵攻後、一二七五年フビライ・ハーンはさらに杜世忠らを使者として送った。北条時宗はこれらの使者を斬捨て、博多湾の海岸一体防衛体制を強化した。一方、一二七九年フビライ・ハーンは南宋鎮圧に成功すると、杜世忠らの消息をきかないまま、またもや使者をおくったが、これも斬りすてられる。フビライはここで始めて使者らが斬殺されたことを知り、再び日本遠征の軍派遣を決定した。東路軍と江南軍の二つに分け、東路軍は、元・高麗・江北の兵あわせて四万、江南軍は十万という。一二八一年五月まず東路軍は対馬・壱岐を侵して博多湾に攻め込んだが、日本軍の奮戦により、肥前の鷹島へ退き、予定より遅れて出発した江南軍の到着を待った。六月末江南軍が到着すると、東路軍と合流し、七月末に終結し、太宰府を目ざして最後の総攻撃に移ろうとしたその夜半、再び襲った大暴風雨は、元軍の兵船四千余隻の上に荒れ狂い、そのほとんどは玄海の藻くずとなり、残ったものはわずか二〇〇隻にすぎなかった。日本軍は暴風雨の衰えるのを待って鷹島を攻撃し、二千余人を捕虜とした。元軍十四万のうち生きのびて逃げ帰ったものは三万人にも足りなかったといわれる。これを第二回目の「蒙古襲来」・「弘安の役」という。その後、フビライ・ハーンは日

本遠征計画を続けたが、いずれも挫折して中止された。

フビライ・ハーンの日本遠征の失敗と挫折については、歴史上、日本軍の勇戦と暴風雨によって退けることができたと見なされ、または高麗をはじめとする東アジア諸国の民衆の元朝支配への抵抗があったからだという。つまり、一二三一年から一二五八年まで六次にわたるモンゴル侵入に対する高麗の抵抗と、一二六九年から一二七三までの高麗のクーデターと反乱は、いずれもモンゴルの日本遠征を牽制したのだ。また南宋を支配下においてからも江南を中心とする中国民衆の一揆や反乱が絶えなかったし、さらにベトナム、ビルマやインドネシアへの遠征などが挫折したから、ついに日本遠征計画は中止せざるを得なかったという。

「蒙古襲来」の歴史について、一般教科書とそれについての専門的歴史記述・言説[3]は、ほぼ以上のように概観できる。そのなか、とくに元朝周辺国家・地域の民衆の抵抗と反乱が、ついにモンゴルの野蛮な侵略・拡張を中止させるまでに追い込んだという。実際、そういった見方は、第二次世界大戦後の日本の歴史記述において強調されるようになってきたが、しかし「蒙古襲来」に関して、とくにモンゴル側の歴史的背景については、元朝の歴史的原典資料として、いずれもほぼ『元史』〈二百十一巻〉（一三七〇）と『新元史』〈二百五十七巻〉（一九二二）[4]の記録に基づいて語られてきたといっていい。ところが、この『元史』という原典資料とは、一三六八年（洪武元年）、つまり元朝滅亡の年、明朝太祖朱元璋（一三二八～一三九八）によって至急編修の御旨が出され、その翌一三六九年李善長を監修とし、宋濂など前後合計二九人によって本格的な編纂が着手されはじめたものである。トータル編修時間わずか三百三十一日間で、一三七〇年に完成されたが[5]、それはまさに中国の正史の編纂史上、初めてのインスタント正史ともいえるものだった。明朝朱元璋政権の根拠を緊急にまかなうため短時間に編集されたこの『元史』は、いうまでもなく元朝蔑視的な史観を前提にして編纂され、フビライ・ハーン執政の実態についてどこまで客観的に記述されたかは、ともかく、「蒙古襲来」を言及した、主たる原典史料とされる「外夷」の「日本」篇は、わずか二千四百字（句読点含）の文章で綴られたものである。その記録の漏洩、誤りは、その後の柯劭忞（一八五〇～一九三三）[6]によって新たに編修された『新元史』によって大幅に訂正され、補充されたことからも覗われる。

また、そもそも『元史』と『新元史』の編纂は、元朝モンゴル側に目を転じて、その西アジアまで広がる全モンゴル帝国の

拡張と背景について記録するというより、むしろ中国の正史編纂が主要目的であった。そのため、フビライ・ハーンの「蒙古襲来」の真の目的・背景は、単に『元史』や『新元史』などの史料からは読み取れなかったはずである。したがって、今まで日本史における「蒙古襲来」の歴史記述は、元朝モンゴル側の背景・目的について分析の視点を取りいれようとしても、結局、歪んだ歴史を編み出す『元史』や『新元史』などの原典史料に頼るしかなかったといえよう。

しかし、最近、日本の「蒙古襲来」の歴史記述において、徐々にではあるが、新しい視点が導入されつつある。例えば、「戦争そのものの原因の解明は日本史の側では放棄され、そのために相変わらずクビライの野望のせいにするような単純な理解にとどまっている」[7]のではないか、あるいはヨーロッパのモンゴル史観一般のいう日本への「二大遠征は帝国の拡大衝動という、あの偉大なモンゴルの伝統にかきたてられたものだった」[8]という見方を鵜呑みにしているのではないか、といったような疑問は、最近、まずユーラシア世界の歴史をトータルで鳥瞰してモンゴル帝国全体史を研究する、日本の専門家たちによって投げかけられているのである。

3　モンゴル帝国とその実態

事実、最近になってから徐々に大まかな輪郭を判明してきたことだが、十三、四世紀モンゴルの歴史とは、ヨーロッパからアジア全体に及ぶ広範の地域にわたる文明圏と文明圏との動態的通交と連携された歴史であり、その誕生・勃興から衰退までの歴史的推移とは、世界が初めて一つの全体的なシステムとして動き出した時代だった。このような全体的に見るような歴史は、日本を始めとするユーラシア・モンゴル歴史研究者たちがヨーロッパから西アジア、中央アジアから東アジアに跨る約二〇カ国の言語・資料を解読するようになってから、やっと明らかになったことだが、具体的に、その新しい「世界史の誕生」という「日本発の世界史概念」[9]は、一九九〇年代から杉山正明氏を始めとする、岡田英弘氏らの研究者によって発信され、とりわけ堅牢な文献学に裏打ちされた第一級のモンゴル帝国史研究[10]が最近世に送られ、今や一般読者にまで知られるようになりつつある。

もちろん、そういった世界帝国の実態は、実際一体どうであったかは、未だに謎が多く、今後もその専門の研究に委ねるしかない。というのも、歴史上、今まで中国元朝の歴史記録は編年

体式の正統史しか興味なく、ヨーロッパ側の歴史も「モンゴル恐怖」。「モンゴルの嵐」に重点をおいて記録してきたのであり、とくにモンゴル自身は歴史記録すら残さないようにしてきたからである。例えば、世界帝国の夢をみて、現に実行していた当事者となる帝国の各代ハーンは、人間の現世と歴史と資料記録に対して懐疑的な「ニヒリスト」で、いずれも天の神（テングル）を篤信するシャーマニズムの信仰者か、シャーマンそのものだと自称していた人々だった。そしてハーンの歴史記録ですら『元朝秘史[11]』と称したように秘密にして、すべてのハーンの埋葬した墓までも隠してしまったのである。したがって、十三・四世紀のモンゴルの拡張と、チンギス・ハーン黄金家族の真相を目撃し、わずかながらそれらを記録して残してくれたのは、当時主要ハーンに仕えていたアラブ・ムスリムを中心とする多人種・多民族の官僚・財務官・商人・使節・旅行者であった。

実際、人々がモンゴル帝国の真相に近づけるためには、現在のグローバル時代こそ可能となってきたが、しかしかつてあのユーラシア東西南北に散らばった、多民族の多言語に記録されてきた文献資料を蒐集し、それらを解読できるような日本人研究者が現われるまでは、実に約七〇〇年も待たなければならなかったのである。

このモンゴル帝国史を中心に構築された新しい世界史概念を大まかに素描してみると、凡そ次のようになる。一二〇六年チンギス・ハーン即位後、半世紀経った一二六〇年、「ユーラシア東西で、ほぼ時を同じくしてふたつのことがおき」、それが「世界史を変えた年」と見なされる。[12] つまり、モンゴル帝国は、一二六〇年ごろユーラシア東西二つの大軍事作戦を企画していた。ユーラシア西側ではチンギス・ハーンの孫フレグ（一二一八～一二六五）によって率いるモンゴル西征軍がバクダートのアッバース朝カリフを倒し、シリアに進攻し、さらにエジプトに政権を立てたマムルーク軍と対峙してエルサレムへの進撃を検討していた。ことは一二六〇年二月、フレグが率いる本隊は突然モンゴルへ退き帰ることになった。というのも、フレグの兄、第四代モンゴル皇帝モンケ・ハーン（一二〇八～一二五九）が半年前の一二五九年八月、ユーラシア東、中国四川での作戦中病死したという訃報が届いたからである。モンゴル時代のユーラシア東西間のニュースは駅伝によって当時伝達されているのが、凡そ六カ月で事足りていた。フレグは帰途のアゼルバイジャンを経由していたとき、新しいハーン、フビライが即位したというニュースが届き、フレグはアゼルバイジャンにとどまり、イランを中心に自立することを決意した。歴史上これを

フレグ・ウルス（国）、あるいはイル・ハーン帝国という。しかし北にはジョチ・ウルス（別名キプチャク・ハーン帝国）がすでにロシア諸公国まで支配下においていたので、のちに地理的な要素と、それぞれの支配下の住民の信仰などの要素で、フレグ・ウルスがジョチ・ウルスと敵対する宿命となるのである。こうしてモンゴル・ハーン・ウルスの「ユーラシア西半分は一挙に政治の多極化の時代を迎え」[13]ることになる。

一方、ユーラシア東側のモンゴル東征軍は、モンゴル皇帝モンケ・ハーンによって率いられ、南宋親征中、一二五九年八月陣営で急死した。それによって帝位継承にまつわる混乱が起るが、フビライはあまりにも幸運にして翌年四月後継者となる。正当性が問われるまま即位したフビライは、「クーデター」政権ともいわれ、それが発端となり、北西ユーラシアのジョチ家、中央アジアのチャガタイ家、西アジアのフレグ家は、それぞれ自立体制を整えるようになる。今まで歴史上これをもってモンゴル帝国の「解体」とよんでいるが、実際、新しい文献資料に基づいて判明されたのだが、それは「一二六〇年前後を境として、モンゴル帝国は、その内側にさまざまな対立をかかえながらも、大ハーンの中央政権のほかに幾つかの複数の政治勢力の核をあわせもつゆるやかな多元複合の連邦国家に変身し始めたのである。モンゴルは、みずからも、まったく新しい時代に入った。そしてめざめて活動し連携しあう新時代にみちびかれていった。それは、人類史上、かつてそれとして明確には味わったことのない状況であった。世界史は、大きく転回したのである」[14]。つまり、ユーラシア西側と東側との征西軍・東征軍がそれぞれ一時挫折したが、継承権にめぐって内側に対立しながら、ゆるやかではあるが、この時点から確実に連携しあう世界国際連邦国家が形成されたのだ。世界を鳥瞰する地図は、この頃初めて誕生し、事実として、アフリカ・ヨーロッパ・地中海域・中東・インド亜大陸・アジア・東アジアの世界全体地図――とりわけバルトロメウ・ディアスの喜望峰発見より少なくとも百五十年も早く海に囲まれたアフリカが描かれていた世界全体地図――例えば『混一疆理歴代国都之図』は、一四〇二年の日付ですでに製作され、発行されていた。[15]洋の東西を連携してグローバルにみる世界史、いわばボーダーレスの世界史の起源はこの時期から誕生したのである。

4　第一次「蒙古襲来」と「大元大モンゴル国」

モンゴル帝国が東洋と西洋へと両方に拡張して、西征軍と東

征軍がそれぞれの侵攻先において支配領域を確定した頃、ハーン権力中心も、北から南東に移るようになる。つまり、一二六〇年代半ばからモンゴル支配領域全体がフビライの帝国の新しい帝都を中心に動き、フビライ・ハーンの支配領域がその他のウルス（国）と多元複合的な連邦国家をなし、いわゆるフビライの帝都を中心に「モンゴル世界連邦を構成した」[16]のである。そういった「世界連邦」を連携してゆくには、当然のことだが、自然に多人種・多民族のブレーンがそれぞれ各ハーン国に仕え、各連邦国が様々な人種・民族によって営まれていた。そのなか、とりわけフビライ帝国の権力中心にいるブレーンや政治顧問は、人種を問わず招集され、複数の文明圏、文化圏に対応できるように人材がそろえていたという。その中心的なメンバーはムスリム官僚・商人（イタリア探検旅行家マルコ・ポーロですら政権奉仕に利用されていた）で、そのほか漢族、女真族、チベット族、キタイ族など官僚・軍人によって組織され、その財務機構は「イスラーム中東での伝統とやりかたをそっくりといっていいほどとりいれた」。元朝の新国家の基本構想は「草原の軍事力、中華の経済力、そしてムスリムの商業力というユーラシア史を貫く三つの歴史伝統の上に立ち、その三者を融合するものとなった」[17]。そういった融合は、さらに多人種・多民族の側近グループたちによって、遊牧・農耕・海洋という三つの異なる世界がリンクされるように構想され、実行することが可能だったという。そして一二七一年フビライはみずから帝国を「大元大モンゴル国」と名まえをつけ、新しい帝都を「大都」、国号を「大元」、年号を「至元」と名づけた。大都（現北京市）建造とは、一二六六年から始めた壮大な国家建設プロジェクトで、それがフビライの死まで推進される。実際、十三世紀末、大都を中心に通交できるような、東西大陸を覆う駅伝網は、すでに伝統となり、陸運から運河ないし海運までいずれも大都に通じるように建設・整備・維持されるようになったのである。

そして一二六八年から同時に手がけた南宋作戦も、この巨大な国家プロジェクトの一環となった。あしかけ、六年に及ぶ襄陽・樊城両市の籠城作戦は一二七三年に成功したのち、まず鄂州（現武漢市）を無血開城させ、「バヤン（将軍）以下のモンゴル軍が、不戦・不殺の方針で、投降者を歓迎し、しかもほとんど現職にとどめたから、南宋という国家は地くずれをおこして解体し」[18]、各地方市はドミノくずしのようにモンゴル側に降伏し、戦争はほとんどなかったという。一二七六年は杭州も無血開城され、南宋全体がモンゴルに接収されることになる。南宋を接収したフビライ元朝は、そこで実際、海上に展開していた

南宋海上艦隊をもほとんど無傷で手に入れたことになり、陸上帝国から海上帝国への道を歩み始めることになる。その海上艦隊は、のち一二八一年第二回目の日本遠征、すなわち「弘安合戦」・「弘安の役」に参加する。「弘安合戦」後、フビライはアラブ・ムスリム商人たちを中心に海上艦隊をさらにベトナム（一二八五）と、ジャワ（一二九二）へ派遣し、海上通交・貿易ルートの確保のために遠征させた。

このようにフビライの帝国は遊牧型、農耕型、海洋型が融合するようにし、大都（北京）を中核として大ユーラシア交易圏ができあがっていくのである。その交易圏とは、「すくなくとも、東は日本海から西はドナウ河口・アナトリア高原にいたるモンゴル領内では、国境の壁は消えた。そして、ユーラシアと北アフリカをふくめ、陸上・海上ともに、通商の壁はとりはずされた。人類のおもな生活の舞台のほとんどが、史上初めて、『人とものの』の循環を通じて、ゆるやかながらもむすびつけられた」[19]という。当時のモンゴル帝国とは、まさに「大元ウルスを中核とするモンゴル領の全域から、さらにユーラシアと北アフリカをも巻きこんだ超広域の流通と国際通商を、国家主導によって意図して創出しようとした」[20]世界的プロジェクトを抱える国家であった。

そういったユーラシア世界の東西の大循環交通・海運の整備と拡充において、国を挙げての二大プロジェクト、大都(北京)建設と南宋接収長期作戦の最中、フビライは、さらに日本とも通交・修好しようとしたのである。最後の二回を除き、前後六回も使節をおくって忍耐強く日本の返事を待っていたのは、ほかではなく、もともと本格的に日本を征服しようとしたのではなかったという。その第一回目の日本遠征の目的とは、実は、巨大な海上艦隊をもつ南宋接収作戦の一環としての陽動作戦となっており、日本を威嚇・牽制して、南宋の退路を想定していたのではなかったのかと、最近の研究によって分析される。言い換えれば、南宋と経済・貿易ないし文化において密接な関係を持つ日本が、もし南宋海上艦隊の海洋への回旋に協力すれば、どうなるのか、あるいは最悪の場合、相互に連携・連合して北側から大都（北京）に攻撃してきたら、どう対応すればよいのか、フビライ・ハーンはそれを恐れていたのではないかという。

実際、当時の史実はともかく、その疑心と懸念については、一二六六年八月作成されたフビライ・ハーンの「日本国王」へ送る最初の国書と、その国書にまつわる諸々の出来事からもその意図と背景が読み取れる。事実、フビライ・ハーンのこの親書は、作成されてから、紆余曲折して太宰府にもたらされたの

は翌々年一二六八年一月のことで、つまり一年半も途中で遅滞された。この時点では、フビライは「大元大モンゴル国」という国号をまだ名づけていなかったし、南宋攻略も着手し始めたばかりで、完全に南宋を接収したのは、一二七三年、七年後のことになる。したがって、この親書を送る時期には、フビライ・ハーンは南宋と日本、その両方の実態を把握していなかったといえる。というのは、その親書の要点は、ほとんど今後お互いに通交し、親睦をはかりたいということに置かれていたといえる。例えば親書に書かれた「且聖人以四海為家不相通好恺一家之理哉至用兵夫孰所好」というもっとも重要な箇所だが、それを現代語で訳して言い換えれば、以下のようになる。聖人孔子はかつて四海が皆わが家のごとくだといったのだ。[21] したがって同じ四海の内に住んでいる家族同士が通好を拒むのは一家「兄弟」という道理（道徳・天理）に悖ることになるのではないか。ましてや誰が兵を用いることを好むのか、と。儒教学者・官僚のブレーンをかかえていたフビライの戦略にしてみれば、この親書内容は、見事に儒教を尊ぶ日本の倫理に訴えており、それを口実にして通好しようとしたのは、単なる一種の有効な方途・戦略だとしてみてもいい。しかし、この孔子の『論語』からの引用を字義通りに理解するならば、恐らくそれは儒教的礼儀・倫理を尊ぶ国同士が親睦を図るのに、共通の倫理に基づく最大の謙虚な、美辞となっているのではないかといってもよいであろう。つまり、この親書は聖人孔子の「四海為家」という儒教の共通理念を日本は拒むはずはないという前提に基づいて書かれたのではなかろうか。もちろん、さらに念を押して、誰が兵を用いることを好むのかというふうに、そこに威嚇・脅迫をも忘れてはいない。ちなみに「四海」とは、しばしば「渤海・黄海・東海・南海」といった海を指す場合もあるが、しかし、この脅かしを含んだ通好・修好を主要な目的とする親書について、当時の日本鎌倉幕府・朝廷はどこまで理解し、解釈していたか、定かではないが、[22] 後の歴史記述・解釈は、いずれもその重点を威嚇・脅迫の文となる「至用兵夫孰所好」におき、その脅迫の文意だけが強調されるようになってきたのである。したがって、この親書の内容を如何様に理解し、解釈して対応するかによって、「蒙古襲来」の発端の運命が定められていたとも言える。ちなみに、たとえ威嚇・脅迫文として解釈しても、「日本国王」に宛てたフビライ・ハーンの親書は、それまで西洋諸国に送っていた各代のハーンの手紙と比較すれば歴然としてわかるのだが、それは実に比較にならないほど謙虚で、低い姿勢をとっていたのである。

実際、日本幕府がなぜ返事をせずに沈黙を守り徹した理由については、歴史上さまざまに推測されてきた。その主な要因は大まかに以下の六点と考えられようか。すなわち、鎌倉幕府は南宋地域とは未だに通交しており、海上貿易も盛んで①、南宋の国勢と経済・文化の成熟度を熟知していただけに、幕府は野蛮な北の蒙古が南宋には勝ち目がない②という前提でフビライの使節に対応していたのであろう。もちろん、南宋からの渡来僧があいつぎ、「建長寺をはじめとする日本の禅林をさながら中国の寺院のような異空間にした[23]」といわれるほどであったので、幕府権力中枢に仕えていた渡来僧の談義は、北方から荒れ狂って攻めてきた蒙古蛮族の族長フビライの親書を信じさせるような雰囲気はなかったはずであろう③。とくに北条時宗の個人的に南宋禅宗に心酔し、「中国文化愛好[24]」していた趣向からにしても、「大蒙古国皇帝」と名乗ってきた芳しくない「異国」は、理解し難い相手だったにちがいない④。一二六九年九月菅原長成によって起草され、のち幕府にとめられた「返牒案」は、そういった「蒙古皇帝」を理解できない当時幕府の当惑ぶりを十分に物語っているのである。『本朝文集』に収める「返牒案」を現代語訳にすれば以下のようになる。

「蒙古」という国号はこれまできいたことがない。今般書面を受け取って少々事情が知ったのみである。そもそも貴国とはこれまで人物の通交もないのに、どうして我が国が好悪の感情を持つであろうか。にもかかわらず由緒をかえりみず凶器を用いようとしていることには疑念を抱く。儒教・仏教の教えでは命を救うことを平素の願い、命を奪うことを悪行としている。どうして帝徳仁義の境と称しながら、かえって民庶殺傷の源を開くのか。天照皇太神より日本今上皇帝まで天子の徳は絶対無二であり、百王の鎮護を受け、四方の夷狄も服属してきた。ゆえに皇土を神国と号するのである。知をもって競うべきではなく、力をもって争うべきではない（『鎌倉遺文』一〇五七一号）[25]。

この「返牒案」に見られるように、北条時宗を始め、当時の朝廷と幕府は、相当当惑しており、その当惑ぶりからしてみても、当然のことだが、沈黙した方がよいであろう。ましてや初めて送ってきたモンゴル国書は、その支配下の高麗人を通じてもたらしてきたもので、しかも親書にはその高麗支配を例にして説いているので、鎌倉幕府は警戒せざるをえなかったであろ

う⑤。もう一つの重要な要因は、大陸と日本との間には、古代から両方にかかわる媒介・仲介となってきた高麗の存在である。高麗は、両方にとってしばしば不安定な存在だったと考えられよう。すなわち、高麗とは日本にとって大陸から恩恵をもたらす仲介になると同時に、危険を吸い寄せる要素でもある。つまり日本と大陸の間には、高麗は仲人にもなれるし、離間策を弄することもできる。「高麗人趙彝」によるフビライへの進言[26]や鎌倉幕府への「三別抄」の「救援要請[27]」は、いずれもその役割を果たしていたのであろう⑥。したがって、高麗の陥落を眼の前にしながら、南宋と密接な関係を保ってきた鎌倉幕府は、静観するしか方法はなかったに違いない。

実際、鎌倉幕府が静観して沈黙を守ったのを、現在の視点からみても上策で、賢明な選択だったといえるかもしれない。なぜならば、日本側にとって、親書を送ってきた「大蒙古国皇帝」フビライは、前にも触れたように、大都建造（北京）と南宋接収作戦開始と同時に、アラブ・ムスリム商人と共に環ユーラシア陸上の通交運輸網を掌握しただけでなく、環ユーラシア海上ルートを企画していた。そして、日本に親書を送る六年も前、西アジアのフレグ・ウルス（イル・ハーン国）、北西ヨーロッパのジョチ・ウルス（キプチャク・ハーン国）、中央アジアのチャガタイ・ウルスは、それぞれの自分の支配領域を確立し、独立を構えながらも、通行・情報・運輸のための相互のジャムチ（駅伝）が張り巡らされ、東西通交はすでに伝統となっていた。そしてその支配圏に入った国・民族であれば、誰もが旅行・貿易と通行の安全がすべて保障され、その宗教・文化もほとんど干渉されずに「モンゴルのリベラリズム[28]」を享受していたといわれるほどだった。事実、西アジアか、北西ヨーロッパからフビライの大都までの運輸・貿易・情報などは頻繁に行われ、その速達は、ほぼ五カ月から六カ月で届いていた。そういったモンゴルの世界的規模で拡張し、ユーラシア全体を連動して動かせていた状況は、当時の日本鎌倉幕府はいうまでもなく、南宋政権ですら想像できなかったはずである。ましてや歴史研究分野とはいえ、そういったモンゴルの全体の動きについては、ついに二十世紀末になってからようやく認識されるようになったことである。

そして、モンゴルの襲来は、ついに起るべくして起った。一二七四年、フビライの南宋接収作戦は全面的に展開し、武漢が無血開城したとき、その一方、同時に第一次日本遠征をも実施したのである。前にも述べたように、それは南宋接収作戦の典型的な陽動作戦で、始終小競り合いにとどまり、威嚇して深入

りせずに、夕方艦隊を戻し、一夜にして全艦隊が撤退したのである。第一次日本遠征が不思議にもそれで終わった。歴史上、この遠征をさまざまに推測してきたが、暴風雨で撤退したのが有力となっている。実際、作戦目的は、それで達成したのではないか。暴風雨による敗北説の原典記録はほぼ『元史』に基づいているが、明朝の『元史』編纂は、日本遠征の背景・目的・真相というより、当然のことだが、モンゴル皇帝の敗戦や失態ぶりを重点において記録してきたので、疑問の点は明らかであろう。一方、高麗側の歴史も同じく、元朝モンゴル人・漢人の混成軍側がいかに無能で、高麗軍がいかに大勢の日本軍を相手に勇猛果敢に戦っていたのかを記録する傾向にあった。[29] したがって、第一次日本遠征は、陽動作戦として、またはユーラシア東と西に同時に遂行していた世界大作戦の一環として、歴史上見て取れなかったのである。したがって、文永の役・第一次「蒙古襲来」は、単なる元朝フビライ・ハーンの征服欲の一挫折だと見做されてきた所以である。

5　第二次「蒙古襲来」

一方、歴史上、すでに裏打ちされたことだが、モンゴル軍の攻略戦争において、通常として未経験の土地につき軽挙妄動することはなかった。つまり、モンゴル軍の侵攻は通常、最初は相手を模索し、それから戦略を立て直して再侵攻か、あるいは別の方策を探るのかが常套手段だった。文永の役も例外なく、恐らくその慣習に従い日本軍の実力を瀬踏みした要素が大いにあったのであろう。というのは、そうではなかったら、一夜にしてきれいに引き帰ったのが理解し難い。しかし、文永の役の七年後、一二八一年の弘安の役は、そうではなかった。事実、一二七九年南宋皇帝が亡くなるとき、フビライの帝国はすでに全南宋を無傷のままに接収し、巨大な海上艦隊を手に入れることによって、海上帝国へと進んでいった。一方、鎌倉幕府は元朝の使節まで殺し、防塁・防衛戦に徹するようになったのが、フビライにとってもっとも許し難いことだったであろう。というのも、遊牧民族にとってたとえ敵側派遣の使節であっても使節殺しはタブーなのである。ユーラシア大陸において、とくにモンゴル歴史上、しばしば使節殺しは予知できない報復の災禍・戦争を招く原因だったからである。いずれにせよ、第二回目の弘安の役・日本遠征は、本格的に占領しようという目的があった。そのねらい・目的について、最小限の範囲で見積もっても、フビライにとって、短期間に手に入れた数十万の南宋軍

と、海上艦隊軍は、「再就職」や維持が必要であったという。それに帝国の使節殺しへの報復という大儀もあり、そして南宋との密接な経済・貿易の相手国を手に入れることでもあろう。名実ともそれは「恒久占領」や「屯田入植」を意味していた遠征であった。

しかしこの一二八一年の弘安の役に投入する十万の江南軍と四万の東路軍は、数字の上では、膨大な軍隊のようにみえるが、「どう史料を調べてみても、この兵のほとんどは武装してはいなかったらしい。旧南宋国の職業軍人たちのうち、希望者をのせた『移民船団』といってもいいないようであった。……しかしじつはおそらく、純粋の戦闘部隊は高麗国より発進した『東路軍』だけといってよかった。さらに、その四万のうち、本当に実戦に投入できるのは、モンゴル・キタン・女真・漢族混成軍のうちの六〇〇〇くらいと、高麗兵のうち、四〇〇〇～五〇〇〇程度であった。つまり一万内外の戦力というのが実態であった」[30]と杉山正明氏は分析する。事実、のちに博多あたりの発掘された船体から大量な農具が積んでいたことがわかった。『元史・日本』におけるフビライの言葉の記録も、日本遠征の目的は占領のためだということが明らかである。つまり、「取人家国、欲得百姓土地、若尽殺百姓、徒得地何用」（人の国を占領するのは、百姓と土地を手に入れるためだ。もし百姓を全部殺したら、その土地は何の用があるのか）という。

しかし、今回の遠征は、東路軍の単独行動や、江南軍の遅延と、暴風雨による長期作戦維持不可能などの要因で、結局、撤退せざるを得なかった。というのも、最新の研究成果によると「意外にも、主要な将官から、下士官クラスまでについては、ひろく無事に帰投していたようなのである。……『モンゴル大艦隊』の主力艦隊は、あまり傷ついていなかったようである。気の毒なのは、『移民船団』専用の船に分乗した人々ではなかったか。ただ、それとても想像である。はたして、どの程度の人々が本当に海に沈み、あるいは岸にあがったものの、日本軍に殺されたり、もしくは捕虜となったのか、じつはよくわからない」[31]という。当然のことだが、明朝編纂の『元史』における日本遠征についての江南軍十万兵帰ったのがわずか「三人」という記録は、明の洪武帝の緊急の政治的要請に応じて作られたもので、それが誇張された言辞だというのが明かである。一方、江南で募った屯田移民船団の戦没者を弔うような動きは、公私さまざまなレベルを問わず、史料記録にはまったくみえない。ほんとうのところは、命を落とした者は、あまりいなかったのであろうか、という説[32]もある。

この第二回目の日本遠征は、海洋帝国の東ルートの通商・貿易の港拠点を確保するためだった。それも屯田移民船団を中心にした人類史上、最初でかつ最大の「外洋航海」をした大艦隊であった。それを撤退させたのは日本軍の善戦と暴風雨であろう。モンゴル軍の慣習的戦法に従って言えば、モンゴル軍は必ず立て直して繰り返し攻めてくるのだ。当然なことだが、第三回目の日本遠征も着々と準備されていた。しかしそれがとうとう挫けられた。それを不可能にした最大の理由は、ほかではなく、まさにフビライ本人にとって、あるいはモンゴル人にとっても最も致命的な弱点によるものであった。それはつまり、モンゴル帝国の建国からかかえはじめた皇族内部の争いであり、全モンゴル歴史によって繰り返し例証されてきた、内輪もめというアキレス腱なのである。日本遠征の一二八一年頃、実際、フビライの皇族・親族の最大の後ろ盾「東方三王家」[33]には、フビライに反旗を翻す兆候があり、ついに一二八七年皇族の反乱が起るべくして起った。歴史上、元朝の「民衆反乱」や、モンゴルの圧政に対する各地域の諸民族の抵抗が第三回目の日本遠征を不可能にしたというが、実際、モンゴル内部の争いは自己破滅へ進んでいた。それを沈静するため、七十三歳高齢のフビライ・ハーンは自ら出撃するまで戦わなければならなかったのだ。そしてその六年後、一二九四年フビライ・ハーンは亡くなる。モンゴル帝国の日本遠征はついにあきらめるようになったのである。

1　石ノ森章太郎著『マンガ・日本の歴史――蒙古襲来と海外交流』中央公論社、一九九一年。

2　ここで「一般教科書」というのは、主として最新版となる石井進・五味文彦ほか著『詳説日本史』(山川出版社、二〇〇五年三月)から遡って、尾藤正英ほか著『新選日本史』(東京書籍、二〇〇一年二月)や、井上光貞ほか著『新詳説日本史』(一九八九年三月)や石井進稲垣泰彦ほか著『日本史』(三省堂、一九八五年三月)など、一〇種類の文部省検定済の教科書を参考にしたものである。

3　歴史的な記述・言説とは、主として戦後において語られてきた「蒙古襲来」の歴史についてのことを指す。例えば相田二郎著『蒙古襲来の研究』(吉川弘文館、一九五八年)、笠原一男の『詳説・日本史研究』(山川出版社、一九六五年)、黒田俊雄著『蒙古襲来』(中央公論社、一九六五年)、網野義彦著『蒙古襲来』(小学館、一九七四年)などがある。その記述は大同小異にして中国・モンゴル側の原典資料はほ

ぼ『元史』『新元史』の域に留まっており、「蒙古襲来」の侵略者側の歴史的背景・状況もほとんどそれに基づいて語られてきたといえる。

4 柯劭忞編修『新元史』（『二十六史』〈伝世蔵書史庫〉第十五巻）海南国際新聞出版中心、一九九六年。

5 中華書局編輯部「出版説明」『元史（第一冊）』中華書局、一九七六年（一頁）。

6 柯劭忞（一八五〇～一九三三）、中国山東省胶州人、一八八六年進士に合格、翰林院編修・湖南教育行政官・湖北提学使・貴州提学使など歴任し、また中華民国時代には清史館の総編纂と代理館長につく。十何年間を費やして編集した『新元史』は、日本東京帝国大学から文学博士号を授与される。

7 近藤成一編・著「モンゴルの襲来」『日本の時代史・モンゴルの襲来9』吉川弘文館、二〇〇三年（九頁）。

8 ロバート・マーシャル著、遠藤利国訳『モンゴル帝国の戦い――騎馬民族の世界制覇――』東洋書林、二〇〇一年六月（二九七頁）。

9 同右書、杉山正明著「モンゴル時代のアフロ・ユーラシアと日本」（一一一頁）。

10 杉山正明著『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会、二〇〇四年二月。

11 元来、『元朝秘史』あるいは『モンゴル秘史』・『蒙古秘史』その書名はモンゴル語で「ノーチ・ドブチ」といい、訳せば『秘史』となる。原本は散逸し、現在残っているのは漢字で音写され、漢文に翻訳された漢文転写翻訳本である。『秘史』はその翻訳段階で「ノーチ・ドブチ」を『蒙古秘史』と名づけたといわれている。というのも、多民族・多人種によって構成され、世界的に拡張した雑多なモンゴル帝国を支配してきたチンギス・ハーンの末裔が、自分の一皇族の歴史をわざわざと、皇族内に限定された読者に向けてモンゴル語で『蒙古秘史』と名づけるのがいかに不自然なのかは、明らかであろう。もし皇族の読者だけに向けてチンギス・ハーン一族の歴史を語ろうとすれば、現代風に考えれば「ボルジギーン秘史」とした方がより自然ではなかろうか。

12 杉山正明著『クビライの挑戦――モンゴル海上帝国への道』朝日選書、一九九五年四月（七〇頁）。

13 同右書（八十頁）。

14 同右書（一二〇頁）。

15 前掲書『モンゴル帝国と大元ウルス』(二、三二頁)。
16 前掲書『クビライの挑戦――モンゴル海上帝国への道』(一二二頁)。
17 同右書(一三四頁)。
18 杉山正明著『遊牧民から見た世界史――民族も国境もこえて――』日経ビジネス人文庫、二〇〇三年一月(三六七頁)。
19 前掲書『クビライの挑戦――モンゴル海上帝国への道』(二四一頁)。
20 前掲書『遊牧民から見た世界史――民族も国境もこえて――』(三七六頁)。
21 孔子「四海之内、皆兄弟也」『論語・顔淵』。
訳せば、「四海の内、みんな兄弟だ」という。その意味から広く転じて「四海(世界)のどこに行っても、自分の家の如く生きていくのだ」ということをも指す場合がある。
22 『元史・日本伝』によって伝えられてきた親書と、書写の『鎌倉遺文』の「蒙古国諜状」は同一文だが、その文意の元来の意図・目的がどのように当時の日本幕府側に理解されていたか、物議を醸す文章だが、文献学・解釈学の視点から再解読・再解釈する必要があろう。
23 村井章介著『北条時宗と蒙古襲来――時代・世界・個人を読む――』日本放送出版協会(NHKブックス)、二〇〇一年一月(一七六頁)。
24 同右書(一八五頁)。
25 前掲書『日本の時代史・モンゴルの襲来9』(三八～三九頁)。
26 『元史・日本伝』。
27 同右書(三九頁)。
28 デイヴィド・モーガン著、杉山正明、大島敦子訳『モンゴル帝国の歴史』角川書店、一九九六年(一三一頁)。
29 前掲書『日本の時代史・モンゴルの襲来9』(一三五頁)。
30 前掲書『クビライの挑戦――モンゴル海上帝国への道』(一八六頁)。
31 同右書(一九一頁)。
32 同右書(一九二頁)。
33 「東方三王系」とは、チンギス・ハーンの三人の兄弟の家族によって構成された勢力で、北京から北と北東に広がる全領域はその家族らの領地である。